

『古今著聞集』「和歌曼陀羅」説話の考察

——本話収録事情と編者橘成季の登場理由——

島 田 遼

はじめに

本稿では、『古今著聞集』（以下『著聞集』）巻第五・和歌第六に収められている第一六四話「雲居寺の瞻西上人」と和歌曼陀羅」説話に関する考察をおこなう。和歌第六に収められている説話であるが、和歌そのものは一首も登場しない。代わりに和歌曼陀羅というものの由来や現状について語られている。登場する人物は主に大中臣家の人々と瞻西上人であるが、末尾に『著聞集』編者橘成季が登場する珍しい形をとっている。本稿では、登場人物の関係について、また説話中の出来事がいつごろのことであるかの推定、またなぜ橘成季が本話をこの部分に収録しているのかを考察する。また瞻西や和歌曼陀羅といった仏教に関する事項と、大中臣家や伊勢神宮といった神道に関する事項が混在している話である。しかし本

話の中心は伊勢神宮と大中臣家の人々であるという点も明らかにしたい。

一 本文とその問題点

まずは本話の本文を提示する。底本は甲門第一類第一種本である近衛家本（京都大学附属図書館寄託本）を用いる。¹

祭主神祇伯親定、伊勢国、岩出^{いはで}といふ所に堂を建てて、瞻西上人を請じて供養を遂げけり。其の布施にてぞ、雲居寺をば造畢せられける。彼の上人、歌を好まれければ、時の歌詠^よみ常に寄り合ひて和歌の会ありけり。和歌の曼陀羅を図絵して過去七仏を書きたてまつり、又卅六人の名字を書き著せり。又「諸悪莫作、衆善奉行」の文を銘に書かれたる色紙

形あり。義房公ぞ清書したまひける。

又件の・曼陀羅は本寺の重宝にてあるべきを、いかなりける事にか、神祇大副親仲造宮の時、子息土左權守親経が元へ売りて来りけるを、錢廿貫にて買ひ留めてけり。相伝して親守入道が元^{もと}にあり。建長元年九月、外宮遷宮に、予参向の時此の曼陀羅を請ひ出して拝みてまつりて、之を記す。

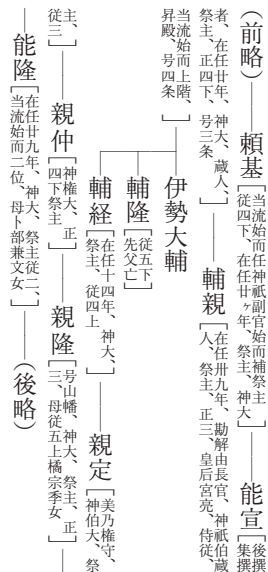
以上が本話の本文である。

問題点を整理しておこう。まず、登場人物たちは何者であり、どういった関係なのか。また、人物関係などからできごとの年代を推定することは可能なのだろうか。また、なぜ『著聞集』のこの部分に本話が収録されているのか。これらの問題点を考察してゆく。

二 登場人物

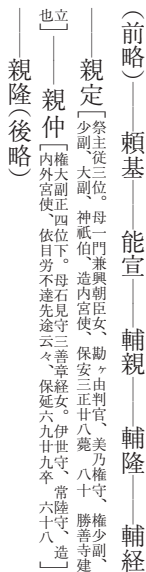
(一) 大中臣氏の人々

本話の登場人物のうち、中心となる大中臣氏の人々から見てゆこう。登場するのは「親定」「親仲」「親経」「親守入道」である。まず『尊卑分脈』には彼らはどう記されているのだろうか。『尊卑分脈』の「中臣氏」の項を見ると、次の系図が載る。

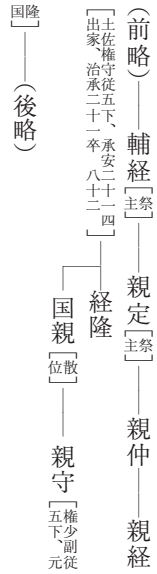


これによると親定は大中臣輔親の孫にあたり、親定の子が親仲ということになる。同箇所頭注には「輔経、按中臣氏系図祭主補任神宮例文実父輔隆」とあり、それを踏まえると親定は輔親の曾孫にあたることとなる。「親経」「親守入道」の名は見えない。

より詳細を知るために『中臣氏系図』⁽³⁾を見てみよう。

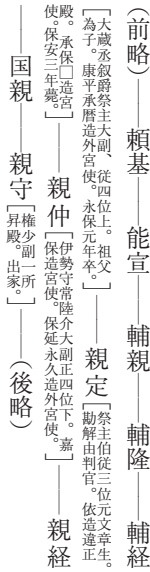


この系図によればやはり親定は輔親の曾孫とされている。ここにも「親経」「親守入道」の名は出てこないが、同系図の別の箇所には、二人が登場する。⁽⁴⁾



この部分によると、親経は親仲の子、親守入道は親経の孫にあたる事がわかる。親守入道は元の名を隆国といったようだが、「隆国」という名も『尊卑分脈』には見えない。

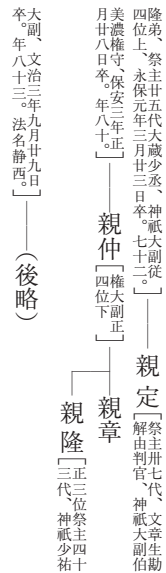
もう一つ『大中臣系図』^⑤も確認しておこう。



この『大中臣系図』によると、親経は親仲の四男にあたると思われる。また親守入道は親経の孫として書かれている。同書に載るもう一つの『大中臣氏系図』^⑥には次のようにある。



親仲以降の『著聞集』本話関連人物は見られない。親仲、親経、親守入道に関しては情報が少ないが、親定は鳥羽天皇の御代に公卿になっているので比較的詳細が判明する。^⑦



嘉承三年戊子（一一〇八）

非参議 從三位 大中親定 十一月廿日叙。祭主神祇大副如元。祭主正四位下行神祇大副輔經朝臣一男。母。

治曆二年九十三補文章生。延久三年十一十八任勸解由判官。承曆二十十六從五下（皇后宮御給）。同四二十六從五上。同——神祇權少副。寛治五八六為祭主。同十二月九転大副。同六正七從四下。同八正五從四上。嘉保三正五正四下（太神宮修理賞）。嘉承二二廿正四上。同三十一廿從三位。祭主神祇大副如元。

天仁二年己丑（一一〇九）

非参議 從三位 大中親定 祭主。神祇大副

天仁三年庚寅(一一一〇)

非参議 従三位 大中親定 祭主。神祇大副

天永二年辛卯(一一一一)

非参議 従三位 大中親定 神祇大副。祭主。

十二月廿六日転伯。

天永三年壬辰(一一一二)

非参議 従三位 大中親定 祭主。神祇伯。

天永四年癸巳(一一一三)

非参議 従三位 大中親定 祭主。神祇伯。

永久二年甲午(一一一四)

非参議 従三位 大中親定 祭主。神祇伯。正

月廿二日兼美乃權守。

永久三年乙未(一一一五)

非参議 従三位 大中親定 祭主。神祇伯。美

乃權守。

永久四年丙申(一一一六)

非参議 従三位 大中親定 祭主。神祇伯。美

乃權守。

永久五年丁酉(一一一七)

非参議 従三位 大中親定 祭主。神祇伯。美

乃權守。

永久六年戊戌(一一一八)

非参議 従三位 大中親定 祭主。神祇伯。

元永二年己亥(一一一九)

非参議 従三位 大中親定 祭主。神祇伯。

元永三年庚子(一一二〇)

非参議 従三位 大中親定 祭主。神祇伯。

保安二年辛丑(一一二一)

非参議 従三位 大中親定 祭主。神祇伯。

保安三年壬寅(一一二二)

非参議 従三位 大中親定 祭主。神祇伯。二

月廿八日薨。

また『二所太神宮例文』⁽⁸⁾「第八 祭主次第」には次のようにある。

^{号始出伯}
親定

輔経一男。寛治五年八月任。超二人。在任卅二年。任美濃權守。保安三年正月廿八日薨。従三位。

(中略)

^{号始出伯}
親章

親定卿一男。神祇大副親仲雖為三男為嫡子。保元二年八月任。永暦二年正月廿五日卒。五十九。在任五年。

親章に関しては本話に登場しないが、親定の孫であったが、親定の嫡子となり、祭主となったようである。

以上の資料をまとめるとそれぞれ次のようになるだろう。

○大中臣規定

長久四年（一〇四三）生（後朱雀天皇の御代）、保安三年（一一二二）没（鳥羽天皇の御代）。八十歳。岩出伯と号す。大中能宣（梨壺の五人）の五世（もしくは四世）の孫、大中臣輔親の曾孫（もしくは孫）にあたる。父は大中臣輔経（神祇大副、従四位上）、母は、大中臣兼興女だという。『尊卑分脈』『中臣氏』には、規定は輔親の孫のように書かれているが、『大中臣系図』には、規定の父輔経が、祖父である輔親の養子になったという注記があり、その可能性もあるだろう。治暦二年（一〇六六）九月十三日文章生、延久三年（一〇七二）十一月十八日勘解由判官に任じられる。『大中臣氏系図』によると、承保年間（一〇七四〜七七）「違正殿（伊勢殿＝伊勢神宮か）造営のため造宮使に任じられたという。承保三年（一〇七六）には伊勢神宮内宮の式年遷宮が行われているので、その時のことを指すか。承暦二年（一〇七八）十一月十六日従五位下に叙される。同四年（一〇八〇）二月十六日従五位上に叙され、神祇権少副に任じられる。寛治五年（一〇九二）八月六日伊勢神宮祭主に任じられ、同年十二月九日神祇大副となる。同六年（一〇九二）正月七日従四位下に叙される。同八年（嘉保元年／一〇九四）正月五日従四位上に叙され

る。嘉保三年（永長元年／一〇九六）正月五日、太神宮修理の賞として正四位下に叙される。嘉承二年（一一〇七）二月二十日正四位上に叙される。同三年（一一〇八）十一月二十日従三位に叙され、翌年天仁二年（一一〇九）鳥羽天皇の御代に非参議ながら公卿に名を連ねる。天永二年（一一一一）十二月二十六日神祇伯に任じられる。永久二年（一一一四）正月二十二日神祇伯と兼官で、美濃権守に任じられる（同五年／一一一七まで）。保安三年（一一二二）二月二十八日薨ず（『中臣氏系図』では正月二十八日とする）。享年八〇。また『中臣氏系図』には「勝善寺建立也」とあるが、勝善寺という寺を建ててそこに葬られたのだろうか。

○大中臣親仲

延久五年（一〇七三）生、保延六年（一一四〇）九月二十九日没。六十八歳。父は大中臣規定、母は石見守三善章経女だという。伊勢守、常陸守（『大中臣系図』によれば介。三章で扱う源俊頼の『散木奇歌集』の異本『源木工集』の記述からも、守でよいだろう）を歴任、神祇権大副に任じられる。正四位下に至る。『大中臣氏系図』に、「嘉保造宮使。保延永久造外宮使」とあるが、嘉保二年（一一九五）九月に内宮遷宮、永久二年（一一一四）九月に内宮遷宮、同四年（一一一六）外宮遷宮、保延元年（一一三五）外宮遷宮が行われている。これらの遷宮に際して、

造宮使に任じられたのであろう。「依目勞不達先途」とあることから、目の病が原因で正四位下より上に昇進することはなかったようである。子息親章は親仲の三男であるが、祖父親定の養子となったようである。

○大中臣親経

永長二年／承徳元年（一〇九七）生、治承二年（一一七八）十月一日没。八十二歳。父は大中臣親仲、母は不明。『大中臣系図』によると、親仲の四男の可能性が高いか。土佐権守に任じられる（年次不明）。従五位下に至る。承安二年（一一七二）十一月四日出家し、治承二年（一一七八）薨ず。

○大中臣親守入道

生没年未詳。祖父は大中臣親経、父は大中臣国親。母は不明。神祇権少副、従五位下に至る。元の名を隆国といったらしい。出家して親守と名乗ったか。親守については不明な点が多いが、『著聞集』巻第二（釈教第二）第六八話「大中臣長家大般若經書写のこと」に登場している。

神祇権少副大中臣親守、年来大般若一筆書写の志ありけれども、むなしくてやみにけり。常のことぐさに、「此願を心にかけて、一日に二枚ばかりづゝ書たてまつるとも、十余年にははてなん。口惜くも思

たゝぬかな」といひけるを、前権大副同長家きゝて、忽に知発して、此願を思立て、終に一筆書写の功をおへてけり。（中略）彼親守は、五部大乘經自筆に書たてまつりたるものなり。まさしく正直のものにて、ながく虚言などせざりしもの也。「かゝる不思議こそありしか」とて、親守かたりしをきゝてしるし侍なり。

本話においても成季は親守に和歌曼陀羅を見せてもらっていたように、成季と親守は同時代の人物であり交流があったのである。

（二）その他の登場人物 ○瞻西上人

瞻西は天台宗の僧である。瞻西については、鷲尾順敬氏^①、藤田寛雅氏^②、川勝政太郎氏^③、五味文彦氏^④などに詳細な研究がある。比叡山を離れ、雲居寺に住し、声明や説法に優れ貴顕から卑賤まで信仰を集めたようである。また和歌もよくした人物であった。瞻西の元には藤原基俊といった有名歌人たちが集っていたようである。小熊幸氏によるとこれら雲居寺に集っていた歌人たちは、「浄土教僧侶としての修業を積み、説教の名手として世に知られるようになった宗教家瞻西上人の許に教えを乞

うべく集い、あるいは何らかの仏事を営むために雲居寺へ参集した人々が、それぞれに歌会をもった¹⁶⁾ような、多種多様な集合体であったという。『著聞集』に「彼の上人、歌を好まれければ、時の歌詠み常に寄り合ひて和歌の会ありけり」とあるように、瞻西上人の元では歌会、歌合がしばしば行われていたようである。瞻西上人による歌合は、例えば『雲居寺結縁経後宴歌合』などが挙げられる。判者は基俊、歌人には源俊頼などが参加する歌合であった¹⁷⁾。

『著聞集』の本話に戻ると、この瞻西上人が、大中臣親定が岩出に堂を建てた際に供養をし、その布施で雲居寺を造畢したという。その後、和歌曼陀羅なるものを作り、過去七仏を描き、そして三十六人撰の歌人たちの名を書いたという。その和歌曼陀羅に「諸悪莫作、衆善奉行」という七仏通戒の偈を「義房公」なる人物が清書したようであるが、この「義房公」についてはよくわからない。『尊卑分脈』には「義房」という人物は十一人ほど見られる。藤原氏が一名、他は源氏である。しかし、いずれの人物も、本話における和歌曼陀羅が作成されたであろう年代¹⁸⁾より後代の人である。特定は難しいだろう。本話には瞻西や和歌曼陀羅といった仏教事項が登場する。神官も出家するような時代であるから、神仏を明確に分離することはできないが、本話においてより重要な

のは、伊勢神宮と大中臣家の人々である。その点については第四章で触れたい。

三 親定と岩出、また源俊頼との関係

親定の周辺をもう少し探ってみよう。源俊頼の『散木奇歌集』¹⁹⁾にその名が見える。

伊勢に侍りけるころ、祭主親定が岩出といふ家
おもしろしと聞きてまかりて見けるに、まこと
におもしろかりける中にも川向ひの山づらいつ
なりけるが思ひ出でられて詠める²⁰⁾

をちこちのとやまのすそを恋しともいはで思へばし
る人もあらじ

(第九・雑部上・一三五八)

詞書によると親定が岩出に家を建て、そこを俊頼が訪ねたようである。歌中にも「言はで」と「岩出」が掛詞として用いられている。俊頼は、前述の通り瞻西と交流があった。また『無名抄』²⁰⁾にも基俊とともに瞻西と交流があったことの記述がある。そのような交流の中に、親定も加わっていたのだろう。

しかしこの詞書、歌には異文が見られる。冷泉家時雨亭文庫蔵の『源木工集』には次のようにある。

伊勢に侍りけるころ、常陸守親仲が岩出の住処
をおもしろしと、聞きて見にまかりたりけるに、
まことにおもしろかりける中にも、川の外の裾
のをかしく見えければ、又の目言ひ遣はしける
をちこちのと山のすそをこひしともいへばおもへば
しる人もなし

(巻第十・雑部・一二四九)

この『源木工集』によれば俊頼が訪れた岩出の家は、親
定の息親仲が建てたものという。

ここで岩出と大中臣家の関係を確認しておこう。『伊
勢名勝志』には「岩出ノ里 岩出村ノ地ナリ宮川ニ沿フ
往昔神宮祭主ノ居住セシ処ナリ」とあり、大中臣輔親が
祭主となつて着任した長暦二年(一〇三八)以来、伊勢祭
主が官邸を構えた地である。『新拾遺和歌集』には輔親
の女伊勢大輔の次の歌が採られている。

伊勢に祭主輔親がたてたる岩出寺より三味堂の
法螺貝の失せたるを乞ひ侍りけるをつかはすと
て

伊勢大輔

かすかなる谷のほらをぞ思ひやる秋かぜのみや吹き

てとふらん

(巻第十八・雑歌上・一六〇二)

同様の歌は『伊勢大輔集』にも見られる。

三位、伊勢に建てたる寺の貝なむ失せにたると
て、僧の乞ひにおこせたるに、添へてやりし
かすかなる谷のほらをぞ思ひやる風のみや吹しくと
ふらむ(二四)

三位は伊勢大輔の父輔親のことである。こちらでは「岩
出寺」ではなく「寺」とされるが、同じ寺を指すと考
えてよいだろう。輔親の官邸と「岩出寺」「寺」が同一の
ものか、寺とそれに付随する住居という形だったのかわ
からないが、大中臣家と岩出とは密接な関係があった土
地だと言えるだろう。『著聞集』における親定の「堂」
は、瞻西上人が供養したのであるから、親定も寺、もし
くはそれに関連するものを建てたと考えてよいだろう。

では、俊頼は親定の(『源木工集』では親仲の)岩出の
家をいつ頃訪れたのだろうか。俊頼は官を退いた後、二
度伊勢へ下っている。宇佐美喜三八氏は、俊頼の初度の
伊勢下向は天永三年(一一二二)から保安三年(一一二二)
のある年だとしている。これは前述の歌により、俊頼が

親定の岩出の家を訪れたのは親定生前(親定は保安三年没)のことだろうということからであり、その通りであろう。『源木工集』には、俊頼が親仲の住処を訪れたとされるが、本稿では『著聞集』に基づいて親定の住処を中心に考えたい。もちろん俊頼が親仲の住処を訪れた可能性もある。それについては後述したい。

池田富藏氏は俊頼の伊勢初度下向をさらに絞り込んで、退官直後の天永三年(一一一二)ごろと推定している。理由として、俊頼は退官後しばらく田上(近江)に隠棲しており、その後永久三年(一一一五)には『俊頼髓脳』が完成し、同四年(一一一六)以後は多くの歌合に出席し多忙を極めたことを挙げている。裏付けとして、藤原顕季と俊頼との贈答歌の詞書を挙げている。『六条修理太夫集』に俊頼から顕季の元へ便りが届いた、という部分である。

前木工頭俊頼の君、伊勢^せの下りて後、久しくおと^をもせざりしに、かくなん言ひおこせたりし。

鄙^{ひな}の別れによろづおとろへはてて、おぼつかなきおほよどの、つねにもせさせたまふちふねのよるひるは、浪の心につけながら、月日の過ぎにけることも、なげきの森の、ときはなる上に、薪を積めるうれへは、身にそへる影のごとくにして(後略)

(三三八、詞書)

池田氏はこの部分を、顕季の詞書として顕季が俊頼を同情した言葉で、退官直後にして初めて言える言葉であろう、としている。しかしこれは俊頼からの文と見なければならぬ。もう一点裏付けとして挙げられているのは、『散木奇歌集』に収められる、俊頼が二度目の伊勢下向をした際の藤原実行と齋宮との贈答歌の詞書である。

伊勢に侍りける比、別当実行、公卿勅使にて大神宮へまゐられたりけるに、齋宮の下らせ給ひしをり、行事弁にて侍りけるが、事果てて京へかへるとて宮にまゐりて、日来になれてまかりかへるこそ心ぼそく候へ、かやうにまゐらむ事もありがたく、もし命候はば、公卿になりて勅使にて下らむ時ぞ、かやうにもまゐるべき、と申して上りけるに、十年ばかりありて勅使にて下られたりけるが(後略)

(巻第九・雑部上・一三九〇詞書⁽²⁷⁾)

池田氏はこの詞書部分と、実行の二度目の伊勢下向が保安三年(一一一二)であることから、その十年前が天永三年(一一一二)にあたる、としている。そして「長い在官時代を終えて心ならずも退官した俊頼は京都をしばらくあけて退官後の心を癒すためかつは、家庭の事情もあっ

たようで伊勢に下向したのではないだろうか⁽²⁸⁾」としている。不審な点もあるが、俊頼の最初の伊勢下向が天永三年(一一二二)であり、その際に岩出の親定の堂を訪れたとみてよいのではないかと思う。親定が岩出に堂を建てた正確な年次はわからないが、天永三年(一一二二)以前には岩出に堂を建て、瞻西上人に供養を依頼したのである。

もう一つ、冷泉家時雨亭文庫蔵『源木工集』の「常陸^{ひたち}守親仲が岩出^{すみか}の住処^{すまか}」という記述について考えておこう。親仲も岩出を拠点とし、そこに住処を建てたのかもしれない。ただ、父親定と同時期に住処を建てるということは考えづらいのではないだろうか。そうすると、俊頼が親仲の岩出の住処を訪れたとすれば、それは、俊頼の二度目の伊勢下向の時、保安三年(一一二二)～同四年(一一二三)ごろではないか。俊頼は父親定だけでなく息子の親仲とも交流があったのかもしれない。その結果『源木工集』のような記述が生まれたのではないだろうか。

いずれにせよ大中臣家は岩出の地と縁があり、親定もそこに堂を建てたとみてよいだろう。そして『著聞集』の記述によれば、その親定が建てた堂の供養を瞻西上人がし、その布施により瞻西は雲居寺を造畢したようである。雲居寺は瞻西が住すより前から存在しており、瞻西開基ではない。しかし瞻西は、元永元年(一一一八)に雲

居寺極樂堂を再建、また天治元年(一一二四)に、雲居寺に金色八丈の阿弥陀如来像を造立し、その堂を証応弥陀院と号している⁽³⁰⁾。親定の布施はそれらに用いられたのであろうか。藤田氏は、

親定は、この大像供養の天治元年(一一二四)に先立ち、保安三年(一一二二)に歿している。この工事が相当の日程を要したであろうことは想像されるから、その間にこうした帰信者からの布施物がそのために役立ったであろうと考へるにせよ、親定のそれで「雲居寺をば造畢」されたとは、文字通りには受けとり難い⁽³¹⁾。

と述べているが、ここは『著聞集』の記述を素直に読んでおきたい。親定の布施が雲居寺極樂堂再建、もしくは証応弥陀院と金色八丈阿弥陀如来像の造立に役に立ったのであろう。

『著聞集』には続いて、和歌曼陀羅について記される。親定の布施によって雲居寺極樂堂再建、もしくは証応弥陀院と金色八丈阿弥陀如来像の造立がなされたと考えるならば、元永元年(一一一八)から天治元年(一一二四)にかけての頃、和歌曼陀羅が作成されたのだろう。そこには過去七仏が描かれ、三十六歌仙の名字が書かれた。和

歌曼陀羅がどのようなものであったかはわからない。しかし曼陀羅というからには、金剛界曼陀羅や胎藏界曼陀羅のようなものだったと考えられる。おそらくまず過去七仏を配置し、その間に三十六歌仙の名字が書かれたのだらう。そして、この和歌曼陀羅に三十六歌仙の名字が用いられたことから、親定の布施が雲居寺に役立ったことが窺えるのである。

なぜ三十六歌仙の名字が用いられたのだらうか。本話では、大中臣親定の岩出の堂を供養したその布施で、瞻西が雲居寺を造畢したとされる。そしてその延長で和歌曼陀羅を作成したと読むべきである。『著聞集』の描写に従えば、そのように解釈した方が自然である。親定の布施がどれほどのものだったかはわからないが、それが雲居寺にとって役に立ったからこそ、その後に瞻西が和歌曼陀羅を作成し、そこに三十六歌仙の名字が書かれたという描写が続くのである。つまりは、大中臣家への礼を込めて、大中臣家の歌人二人(頼基、能宣)を含んだ三十六歌仙を用いたのであらう。そして、大中臣家と関係の深い和歌曼陀羅であるから、後に親経の元に売られることとなったのである。

加えて、この平安中後期の人麻呂信仰の高まりも関係しているだらう。「仮名序」でも「柿本人麻呂なむ歌のひじりなりける」とされているが、この時代、歌聖とし

ての人麻呂の人気というものは高まっていたと思われる。藤原公任と具平親王との人麻呂貫之論争⁽³²⁾もそれを示していると言えよう。また人麻呂影供が行われ始めたのもこのころだとされる。六条藤家の祖である藤原顕季が人麻呂影供歌会を行ったのが元永元年(一一一八)である⁽³³⁾。このような時代背景もあり、歌聖人麻呂が含まれる三十六歌仙を和歌曼陀羅に用いたのではないだらうか。

四 年次推定、及び『著聞集』の配列について

前章で親定の岩出の堂の建立、そして瞻西上人による供養が天永三年(一一二二)以前であると述べた。続いては『著聞集』の記述の他の部分の年次を推定したい。

『著聞集』には「神祇大副親仲造宮の時、子息土左權守親経が元へ売^もりて来^きりける」とある。雲居寺の宝である和歌曼陀羅が売られてしまったのである。大中臣親仲は造宮使となり、式年遷宮に複数回関わっていた。親仲は、『大中臣系図』に「嘉保造宮使。保延永久造外宮使」とあるように造宮使に任命されていた。嘉保、永久、保延ごろは、嘉保二年(一一〇九五)九月に内宮遷宮、永久二年(一一一四)九月に内宮遷宮、同四年(一一一六)外宮遷宮、保延元年(一一三五)外宮遷宮が行われている。これらの遷宮に際して、親仲は造宮使に任じられたのであらう。複数回造宮使に任じられているが、瞻西が存命中

に「本寺の重宝」である和歌曼陀羅売却を許すとは考えにくい。瞻西の没年は大治二年（一一二七）であるから、おそらく、和歌曼陀羅が親経の元に売られたのは、瞻西がすでに亡くなっていた保延元年（一一三五）外宮遷宮の時ではないだろうか。

ではなぜ『著聞集』のこの部分にこの和歌曼陀羅説話が収められているのだろうか。

本話第一六四話の前後の話を確認しておこう（関連年表参照）。第一六二話「いろは連歌の事」は永万元年（一一六五）から仁安三年（一一六八）ごろ、第一六三話「道因の出家と実国との歌の贈答」は承安二年（一一七二）、第一六五話「道因法師住吉社にて歌合の事」は嘉応二年（一一六九）、第一六六話「道因法師広田社の夢の告に依りて歌合の事」は承安二年（一一七二）の出来事である。その間に挟まれるようにして収録されているのが本話第一六四話である。

これには伊勢神宮の遷宮が深く関係していると考えられる。この一一六〇年代後半から一一七〇年代前半は伊勢神宮にとって慌ただしい時期であったのである。伊勢神宮における遷宮といえば式年遷宮を指すのが一般的である。しかし式年以外に仮殿遷宮、臨時遷宮と呼ばれる遷宮が行われることがあった。中西正幸氏の研究によれば、仮殿遷宮とは次のような遷宮である。

正殿の朽損、御装束の湿損、あるいは心御柱に異常が起きた場合、神体を仮殿に遷して修繕・修復を加えるものを指す。費用は神税から支弁して、大神宮司が仮殿造立し、修理使が本殿の修理にあたり、祭主が神霊奉遷する。しかし中世では神領の後退から経費を諸侯の寄進に頼り、永享・寛正期以後、仮殿をもって本殿にあてて変則的な事態も避けられなかった。一般的に仮殿は、皮付の原木を用いる大嘗宮のように黒木の御殿を建てるものと、便宜的に宝殿や忌火屋殿・御饌殿（外宮）など既存の殿舎を用いるものがある。前者では、神体が本殿と仮殿とを往復する二度の渡御を、仮殿遷座（遷御）の本殿還座（還御）とに区別する³⁴。

そして臨時遷宮とは次のような遷宮である。

臨時非常の秋に止むなく行なわれ、造宮使が正殿下を造営し、神宝使が御装束・神宝を新調するなど、すべて式年遷宮の格式と規模に準じた遷宮をいう。正殿以下の炎上にともなう内宮臨時遷宮の初例が延暦十一年（七九二）にみられるが、三四ヶ月の準備と半夜一日の御殿修繕に止まる仮殿遷宮にくらべ、臨

時の造営は年月を要し式年遷宮との関連からも、いっそう困難な事態に直面することが多かった。³⁵⁾

中西氏はちょうど本話と関連深い一一六〇年代後半、嘉応元年（一一六九）の内宮臨時遷宮を検討している。

例えば嘉応元年（一一六九）の内宮臨時遷宮を検討してみよう。

仁平二年（一一五二）九月十六日 第二十五回式年遷宮。

仁安三年（一一六八）十二月二十一日 正殿以下、内外院焼亡につき、神体を忌火屋殿に遷座。

嘉応元年（一一六九）六月十七日 黒木仮殿の竣工につき仮殿遷宮。さらに造営使補任の上、十二月十六日、仮殿より新殿へ臨時遷宮。

承安元年（一一七一）九月十六日 第二十六回式年遷宮。

式年遷宮の三年前にあたる仁安三年末、神主宿館より発した猛火は正殿・宝殿・御門・御垣など内外院を悉く焼失させ、身命を賭した禰宜等が辛くも神体を忌火殿に奉遷した。翌年六月に黒木の仮殿に遷宮、さらに一年後には新宮を造営して、臨時遷宮を執行した。³⁶⁾

この際、二年後に迫った式年遷宮に肩代りし、中一年を隔てて実施される外宮の御儀も、内宮に準じて繰り上げではどうか、という意見が問題になった。結局は、臨時遷宮は式年遷宮の周期とは一切関係させるべきではない、という意見が支持されて、二十年目の式年予定の通り、承安元年（一一七一）に内宮遷宮、同三年（一一七三）に外宮遷宮が執り行われた。この時、内宮では僅か二年余りで仮殿・臨時・式年と三度の遷宮を敢行したのである。³⁷⁾問題は嘉応元年（一一六九）に臨時遷宮を執り行う原因となった仁安三年（一一六八）の火災である。『百鍊抄』第八には次のように記されている。

十二月廿一日。伊勢太神宮内宮焼亡す。正殿東西殿の門、及び内外院殿舎悉く灰燼と為る。御体、之を取り出だし奉る。³⁸⁾

より詳しい当時の状況が平信範の『兵範記』任安三年（一一六八）十二月二十四日条に記録されている。

廿四日辛亥 東寺灌頂、権中納言資長、右中弁長方朝臣奉行 太神宮火事、院より召す事有り 西の剋、祭主親隆朝臣の使、書札を持ち走り来たる。状に云く、「去る廿一日申の剋、

太神宮の正殿焼失す。権神主師朝の宿館より猛火出来し、炎煙熾盛し禦滅すること能はず。御正体に於いては無事出だし奉り、暫し忌屋殿に鎮め奉り了りぬ。」と。委細解状進上し了りぬてへり。下官天を仰ぎ周章し殿下に参らんと欲する間、院より召し有り「御使馬允清村馳せ来たる」。即ち馳せ参じ、別当に仰せられしめて云く、「神宮の火事只今聞こし食すに及び、如何に。」と。下官申して云く、「親隆只今此の状を遣はす。奏状未だ知り給へず。」と。

(後略)³⁰⁾

伊勢神宮内宮で十二月二十一日に火災があった。朝廷にその報告が届いたのは、二十四日になってからであった。祭主であった親隆(親仲の息である)の使者が書状を持参した。「御正体」つまり御神体は無事であったようだが、「猛火」と表現されるほど大きな火災だったようだ。続く十二月二十五日条に、伊勢から届いたより詳しい解状が記録されている。

史神宮の奏状を持ち来たる事

廿五日壬子 卯の刻、右少史中原国親、神宮の奏状を持ち来たる。次第無く、解并びに祭主の解状、祭主の名を加ふる宮司の解状なり。其の状に云く、
注進す。

今月廿一日申の時、権神主師朝の宿館より猛火出来す。正殿より始め奉り、東西宝殿并びに中外院の殿舎、御垣門、鳥居、及び禰宜・内人等の宿館に至る迄、地を掃ひ焼失の間、御正体、并びに左右相殿、及び荒祭宮の御体・御政印、出だし奉る事。

右、御所を去ること乾の方四町余り、彼の神主の宿館より火出来し、件の殿舎、御垣門、鳥居、禰宜・内人等の宿館、焼失するに依り地を掃ふ。禰宜等正殿に参入し、御正体、并びに左右相殿の御体、政印出だし奉り畢りぬ。而るに暴風頻なれば、御神宝一物取り出さず、併しながら焼失す。仍て宮司先例に任せて仮殿を造り奉り鎮め奉るべきなり。但し中外院の中、忌屋殿、由貴殿、酒殿、子良の宿、各一字僅かに焼け残る所なり。兼ねて又、荒祭宮炎上の中たるに依り、恐を成し御体を出だし奉ると雖も、殿焼失無き間、本のごとく鎮め奉る所なり。焼失の殿舎、御垣門、鳥居、霊木、禰宜・内人等の宿館の員数、追ひて注進すべき状、件のごとし。

仁安三年十二月廿一日子の時

禰宜正四位下荒木田神主範宗

(中略)

和暦	西暦	出来事	天皇
長久四年	1043	大中臣親定、生。	後朱雀天皇
延久五年	1073	大中臣親仲、生。	白河天皇
永長二年 (承徳元年)	1097	大中臣親経、生。	堀河天皇
天仁二年	1109	親定、公卿になる。	鳥羽天皇
天永三年以前	1112以前	親定が伊勢国岩出に堂を建てるか。	鳥羽天皇
天永三年	1112	源俊頼が岩出の親定の堂を訪れ詠歌。	鳥羽天皇
永久二年	1114	9月、伊勢神宮、内宮遷宮。	鳥羽天皇
永久四年	1116	伊勢神宮、外宮遷宮。8月、瞻西が『雲居寺結縁経後宴歌合』を催す。	鳥羽天皇
元永元年	1118	瞻西、雲居寺極楽堂を再建。	鳥羽天皇
保安三年	1122	親定没。80歳。	鳥羽天皇
天治元年	1124	瞻西、金色八丈阿弥陀如来像を造立供養し、堂を証応弥陀院と号す。	崇徳天皇
大治二年	1127	瞻西没。66歳か。	崇徳天皇
長承二年	1133	伊勢神宮、内宮遷宮。	崇徳天皇
保延元年	1135	伊勢神宮、外宮遷宮。親仲、造宮使に任じられる。この時、和歌曼陀羅が親経の元に20貫で売られる。	崇徳天皇
保延六年	1140	親仲没。68歳。	崇徳天皇
永万元年	1165	『著聞集』第161話「頭中将家通、頭亮邦綱の使を引き留めて返歌の事」。	二条天皇
永万元年～ 任安三年	1165～ 1168	『著聞集』第162話「いろは連歌の事」。	二条天皇
仁安三年	1168	12月21日、伊勢神宮内宮焼亡。「十二月廿一日。伊勢太神宮内宮焼亡。正殿東西殿門及内外院殿舎悉為灰燼。御休奉取出之。」「廿七日。於院殿上被定神宮火事間事。小朝拝有無。并朝覲行幸延否事。」「廿九日。諸卿定申諸道勘申太神宮火災事。庶務可為五ヶ日之由定申之。」(『百鍊抄』)	高倉天皇
嘉応元年	1169	伊勢神宮内宮、臨時の遷宮。「(二月)七日。有仗儀。諸道勘申。大神宮以今年造宮。可為正遷宮哉。然者外宮造替年限。相隨内宮可縮行哉事也。」(『百鍊抄』)	高倉天皇
嘉応二年	1170	『著聞集』第165話「道因法師住吉社にて歌合の事」。10月9日、住吉社歌合。	高倉天皇
承安二年	1172	『著聞集』第163話、道因出家し、実国の元を訪れ歌を詠み交わす。『著聞集』第166話「道因法師広田社の夢の告に依りて歌合の事…」。	高倉天皇
治承二年	1178	親経没。82歳。	高倉天皇
建長元年	1249	伊勢神宮、外宮遷宮。『古今著聞集』作者、橘成季、大中臣親守入道の元を訪れ、和歌曼陀羅を実見する。「(九月)七日乙亥。伊勢外宮遷宮神宝発遣事。」「二十日戊子。被勘改伊勢外宮御遷宮日時。軒廊御卜也。[同宮遷宮延引事。]於院被議定同遷宮延引事。」「廿一日己丑。軒郎御卜也。伊勢事。」「廿五日癸巳。伊勢一社奉幣也。」「廿六日甲午。伊勢豊受太神宮遷宮也。」(『百鍊抄』)	後深草天皇
建長六年	1254	『古今著聞集』成立。	後深草天皇

『古今著聞集』第164話関連年表

祭主正四位下神祇權大副大中臣朝臣親隆⁽¹⁰⁾

榊神主の館から出火し、正殿、東西の宝殿、中院、外院、垣門、鳥居、また禰宜や内人の館まで燃え広がった。御正体などどうにか運び出したが、神宝など持ち出すことができなかったようである。これを受けて朝廷では宣旨が出された。同日条にその宣旨が記録されている。

仁安三年十二月廿五日 宣旨

去る廿一日、伊勢太神宮の正殿、東西宝殿、門垣、及び内外院殿舎、悉く焼失するを以て、先規を訪ねるに、曾て比類^記少なし。早く紀伝・明経・明法道の博士、榊中納言藤原朝臣、式部大輔藤原朝臣、内蔵権頭藤原朝臣、大外記清原頼業、中原師尚等に仰せて、且つ先例に就き言上し量り行ふべき事、且つ旧史を引き、准拠せらるべき蹤を勘申せよてへり。

藏人頭榊右中弁平朝臣信範⁽¹¹⁾

「先規を訪ねるに、曾て比類少なし」とあることから、伊勢神宮にとってこのような事態は前代未聞であったことが窺える。そして紀伝道、明経道、明法道の博士たちなどを動員して、先例を調べ、それに準拠した対応をす

ることが求められた。これ以降も、この火災に対する対応が評議された。結果、中西氏も述べるように、仮殿遷宮、臨時遷宮、式年遷宮が短期間で執り行われることとなった。

この伊勢神宮内宮焼亡事件が、本話が『著聞集』のこの部分に収録される理由であると考えられる。本話は長期にわたる期間を扱った説話であるため、この年代の説話と並べよう、というのは難しい。年次で言えば、親定が岩出に堂を建て膳西が供養したと考えられる天永三年（一一二二）の少し前から、編者橘成季が伊勢に参詣し、和歌曼陀羅を实見した建長元年（一二四九）にかけての話である。「建長元年九月、外宮遷宮に、予参向の時此の曼陀羅を請ひ出して^{をが}拝みてまつりて、之を記す」と締め括られているのだから、和歌第六の最後の方に、当代の話として収録してもいいように思える。しかし成季はそうはしなかった。自身が伊勢を参詣した時の外宮式年遷宮から、神宮史上稀に見る、仁安・嘉応にかけての伊勢神宮焼亡、仮殿・臨時・式年遷宮を想起し、本話をこの部分に収録することにしたのである。本話には膳西上人や和歌曼陀羅にまつわる話も出てくるが、一貫して中心となっているのは伊勢神宮、及び大中臣家の人々なのである。

おわりに

最後に、親経が和歌曼陀羅を購入した「錢廿貫」という価格について、そして編者橘成季が本話に登場する理由について触れておこう。

和歌曼陀羅が親経の元に売られたのは保延元年(一一三五)だと推定した。一貫は一〇〇〇文である。少し時代は下るが、寛喜元年(一二二九)の米価が一石あたり一〇〇〇文である。さらに踏み込んで「⁽⁴³⁾齋宮歴史博物館」HPの興味深い考察を参考に考えてみよう。これは『西宮記』写本に紛れ込んでいた検非違使関係資料による考察である。この史料には長徳二年(九九六)、検非違使が捕らえた窃盗犯についてが記録され、盗まれたものの価格が示されている。その中には銀造打出太刀という装飾された飾り太刀などが紹介され、それは一五貫文だったようである。そして米一石をだいたい二四、〇〇〇円、つまりは一貫二四、〇〇〇円だと換算している。つまり銀造打出太刀は三六〇、〇〇〇円程度だったという。長徳二年(九九六)と、本話の保延元年(一一三五)をそのまま比較することはできないが、目安としてこれに当てはめると、二〇貫で売られた和歌曼陀羅は、四八〇、〇〇〇円ほどということになる。高いのか安いのかはよくわからないが、瞻西上人の没後、和歌曼陀羅を売ってし

まうとは、雲居寺はどのような状況だったのだろうか。

本話には編者成季が登場する。なぜだろうか。五味彦氏によると、成季の『著聞集』編纂態度は、「諸記録を『ひろく勘へあまねくしるす』こと、不確かな説話ではできるだけ排除し、『実録』を載せ⁽⁴⁴⁾」ようというものがあった。また『著聞集』跋文には「或は家々の記録をうかがい、或は処々の勝絶をたづね、しかのみならず、たまほこのみちゆきずりのかたらひ、あまさかるひなのでぶりのならひにつけて、たゞにきゝつてにきく事をもしる⁽⁴⁵⁾」したものだ⁽⁴⁶⁾と書かれている。語り伝えられて来た説話だけでなく、成季自身の身に起きた出来事、自身が直接聞いたことをも記しているのである。故に本話に「予」と成季本人が登場するのである。五味氏は、『著聞集』における伊勢関係説話は成季が伊勢を尋ねた折に入手した話群であるとする⁽⁴⁷⁾。二節で取り上げた第六八話にも「親守かたりしをきゝてしるし侍なり」とあったように、同時代人で交流のあった親守からの情報を元に説話化しているのである。本話でも親守から和歌曼陀羅を見せてもらい、その際に和歌曼陀羅の由来等を聞いたのだろう。そして、仁安・嘉応にかけての伊勢神宮焼亡、仮殿・臨時・式年遷宮と結びつけ、本話がここに収録されたのである。

そもそも編者成季が『著聞集』に顔を出すのは非常に

珍しい。成季が自身を「予」と表現して説話内に登場するのは、序、跋の他に巻第六管絃歌舞の第二七六話だけである。^④序、跋は別として、第二七六話は、「豊原時元同時廉が蘇合序を評する事並びに仙洞御講に成季太鼓を仕る事（大系表題）」という話である。蘇合香という楽についての話だが、この話では成季自身が仙洞の管絃の会（後嵯峨上皇主催）で蘇合序を奏する際、太鼓を担当した。それをきっかけとして蘇合序奏法に関する諸説、由来などを調べ、説話として収録したと考えられる。本話第一六四話も、伊勢神宮に参詣し、和歌曼陀羅を見た、という成季自身の体験から始まり、親守から聞き知ったことや、和歌曼陀羅に関連する事柄を調べ上げ、肉付けして説話の形となして、収録されたものと考えられる。いづれにせよ、「予」と成季自信が登場するのは、成季本人の体験を契機としてまとめた説話であるといえよう。ただ語り伝えられてきた説話を集めるのではなく、典拠や史実、由来にまで視野を広げ、関連事項をできるだけ明らかにしようという、成季の説話に対する姿勢が窺える話となっているのである。

【注】

- (1) 京都大学貴重資料デジタルアーカイブの画像による。
二〇二一年十月二十九日閲覧。

<https://mda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00008692#?c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xywh=2472%2C114%2C8014%2C2275>

適宜改行し、句読点と濁点を付し、漢字は通行の字体に改めた。漢字に改めた箇所はルビにより元の仮名表記を示した。送り仮名を補った箇所はルビに「・」を示した。歴史的仮名遣いと異なる表記は歴史的仮名遣いに改め、元の表記をルビに示した。

- (2) 黒板勝美・国史大系編修会編（一九五八／昭和三十三年）『尊卑分脈 第四篇』（新訂増補 国史大系 第六十卷下）、吉川弘文館、八三／八五頁。新装版（二〇〇一／平成十三年）による。傍書は割書にて示す。漢字は通行の字体に改めた。

- (3) 塙保己一（一九三二／昭和七年）『群書類従』第五輯（系譜・伝・官職部）所収、系譜部・巻第六十二、統群書類従完成会、訂正三版（一九七七／昭和五十二年）による。一九五／一九六頁。傍書は割書にて示す。漢字は通行の字体に改めた。

- (4) 同前。二二六／二二七頁。

- (5) 塙保己一、補・太田藤四郎（一九二八／昭和三年）『統群書類従』第七輯下（系図部）所収、系図部・巻第七十七、統群書類従完成会、訂正三版（一九七三／昭和四十八年）による。九五／九八頁。傍書は割書にて示す。漢字は通行の字体に改めた。

- (6) 同前、一一一／一二二頁。

(7) 黒板勝美編(一九三八/昭和十三年)『公卿補任 第一篇』新訂増補 国史大系 第五十三巻)吉川弘文館、三七三―三九一頁。新装版(二〇〇〇/平成十二年)による。漢字は通行の字体に改めた。

(8) 塙保己一(一九三三/昭和七年)『群書類従』第一輯(神祇部)所収、神祇部・巻第五、続群書類従完成会、訂正三版(一九七七/昭和五十二年)による。一九三頁。漢字は通行の字体に改めた。ジャバンナリッジ版の内容解説によると、伊勢内外宮職員の補任に関する類聚だという。

(9) 以下、本稿における伊勢神宮に関する事項は、『神宮史年表』を参照した。神宮司庁編、二〇〇五/平成十七年、戎光祥出版。

(10) 五味文彦(一九八六年一月)『古今著聞集』と橘成季(下)、『古代学協会『古代文化』第三八巻第一号、六頁。

(11) 永積安明・島田勇雄校注(一九六六/昭和四十一年)『日本古典文学大系84 古今著聞集』による。岩波書店、一〇三―一〇四頁。

(12) 鷲尾順敬(一九三八/昭和十三年)「瞻西の説経教化」、『日本仏教文化史研究』所収、富山房。

(13) 藤田寛雅(一九四九/昭和二十四年九月)「雲居寺瞻西伝拾遺」大正大学史学会『仏教史研究』第一号所収。

(14) 川勝政太郎(一九五一/昭和二十六年八月)「洛東雲居寺と瞻西聖人」史迹・美術同攷会『史迹と美術』二

一四号所収。

(15) 五味文彦(一九八四/昭和五十九年)「勧進聖人の系譜」、『院政期社会の研究』第二部「院政の展開」所収、山川出版社。

(16) 小熊幸(一九八七/昭和六十二年三月)「瞻西上人とその周辺―雲居寺に集う歌人たち―」四一頁。都留文化大学国語国文学会『国文学論考』第二三号。

(17) 萩谷朴(一九九六)『平安朝歌合大成 増補新訂』第三巻、同朋舎出版、一七八四―一七九一頁。

(18) 三章、四章で触れるが、親定が岩出に堂を建て、瞻西上人が供養したのが一一二二年前、瞻西は一一一八年前に雲居寺極樂堂を再建、また一一二四年に、金色八丈阿弥陀如来像と証応弥陀院を造立している。和歌曼陀羅が作成されたのは、一一一八年から一一二四年あたりにかけてだと考えられる。そして和歌曼陀羅が親経の元に売られたのは、一一三五年である。

(19) 和歌の検索には『新編国歌大観』を用いた。ただし私家集に関しては『新編私家集大成』による。いずれも古典ライブラリー版を用いた。適宜本文を整えた。歴史的仮名遣いと異なる表記は歴史的仮名遣いに改め、ルビに元の表記を示した。この『散木奇歌集』は書陵部蔵本による。

(20) 前述『雲居寺結縁経後宴歌合』での出来事である。俊頼の歌の腰の句がよくない、と基俊が非難した。しかし琳賢が貫之の証歌を出して、基俊が黙り込んでしまっ

た、という話である。

- (21) 国立国会図書館デジタルコレクションによる。宮内
默藏(一八八九／明治二十二年)、川島文化堂。二〇二一
年十月二十九日閲覧。
<https://dlndi.go.jp/infondjip/pid/765417>

- (22) 『日本歴史地名大系』「岩出村」項より。ジャパンナ
リッジ版による。

- (23) 異同の多数見られる歌なので、久保木哲夫(一九九
二／平成四年)『伊勢大輔集注釈』(私家集注釈叢刊2)に
よった。日本古典文学会監修、貴重本刊行会発行。四五
〇四七頁。本書の底本は、流布本系である三手文庫蔵
『伊勢大輔集』である。

- (24) 書陵部蔵本によると「いはてら」となっている(一
二三番歌)。また久保木氏は『中臣氏系図』の輔親の項
の「釈尊寺建立也」という記述から、岩出寺が釈尊寺の
通称であった可能性を指摘している。

- (25) 「源俊頼伝の研究」一一〇―一三頁。宇佐美喜三八(一
九九二／平成四年)『復刻版 和歌史に関する研究』所
収、「和歌史に関する研究」復刻刊行会、文進堂。原版
は、一九五二年、若竹出版。

- (26) 「俊頼の生涯と歌風の展開」七三―七七頁。池田富
蔵(一九七三／昭和四十八年)『源俊頼の研究』「第一編
金葉集時代と源俊頼」所収。桜楓社。

- (27) 書陵部蔵本による。

- (28) 注26に同じ。七五頁。

- (29) 池田富蔵(一九七三年／昭和四十八年)『源俊頼の研
究』所収「源俊頼年譜」一〇二六頁。桜楓社。

- (30) 注12、八六―八七頁。注13、四七―四八頁。『中右
記』『中右記目録』等を史料とする。

- (31) 注13、四八頁。漢字は通行の字体に改めた。

- (32) 藤原清輔の『袋草紙』に逸話が見える。藤岡忠美校
注(一九九五)『新日本古典文学大系29 袋草紙』による。
岩波書店、一一六頁。上巻に次のようにある。

朗詠の江注に云はく、四条大納言、六条宮に談ぜら
れて云はく、「貫之は歌仙なり」と。宮曰はく、「人
丸には及ぶべからず」と。納言曰はく、「然るべか
らず」と。ここに秀歌十首を書きて、後日に合はせ
らる。八首は人丸勝ち、一首は貫之勝つ。「この歌
持なり」と云々。(後略)

- (33) 『和歌文学大辞典』「人麿影供」項より。佐々木孝浩
執筆、古典ライブラリー版による。

- (34) 中西正幸(一九九五／平成七年)『神宮式年遷宮の歴
史と祭儀』大明堂。「第一章 遷宮の歴史／第一節 遷
宮の形態」、一九頁。

- (35) 注34、二二頁。

- (36) 同前。『百練抄』を史料とする。

- (37) 注34、二二―二三頁。

- (38) 黑板勝美編(一九二九／昭和四年)『日本紀略後篇
百練抄』(新訂増補 国史大系 第十一卷)八二頁。吉川
弘文館。新装版(二〇〇〇／平成十二年)による。原漢文。

漢字は通行の字体に改めた。原文は以下の通り。

十二月廿一日。伊勢太神宮内宮焼亡。正殿東西殿門及内外院殿舍悉為灰燼。御体奉取出之。

(39) 増補「史料大成」刊行会編(一九六五/昭和四十年)『兵範記 四』(増補史料大成 第二十一卷)二六八頁。臨川書店。原漢文。漢字は通行の字体に改めた。原文を以下に示す。

廿四日辛亥 東寺灌頂、權中納言資長、右中弁長方朝臣奉行 西剋祭主親隆朝臣使持書札走来、状云、

去廿一日申剋太神宮正殿焼失、從權神主師朝宿館猛火出来、炎煙熾盛不能禦滅、於御正体者無事奉出、暫奉鎮忌屋殿了、委細解状進上了者、下官仰天周章欲參殿下之間、自院有召、「御使馬允清村馳来」、即馳參、令別当被仰云、神宮火事只今聞食及、如何、下官申云、親隆只今遣此状、奏状未知給、(後略)同前、二六八、二六九頁。原文を以下に示す。

廿五日壬子 卯剋右少史中原國親持来神宮奏状、無次第解并祭主解状、宮司解状祭主加名也、其状云、

注進

今月廿一日申時、從權神主師朝之宿館猛火出来、奉始自正殿、迄至東西宝殿并中外院殿舍御垣門鳥居及禰宜内人等宿館、掃地焼失間、奉出御正体并左右相殿及荒祭宮御体御政印事、右去御所乾方四町余、從彼神主宿館火出来、件殿舍御垣門鳥居禰宜内人等宿館掃地依焼失、禰

宜等參入正殿、奉出御正体并左右相殿御体政印畢、而暴風頻之間、御神宝不取出一物、併焼失、仍宮司任先例奉造飯殿可奉鎮也、但中外院之中、忌屋殿、由貴殿、酒殿、子良宿、各一字僅所焼殘也、兼又荒祭宮依為炎上之中、成恐雖奉出御体、殿無焼失之間、如本所奉鎮也、焼失殿舍御垣門鳥居靈木禰宜内人等宿館員數、追可注進之状如件、

仁安三年十二月廿一日子時、

禰宜正四位下荒木田神主範宗

(中略)

(41) 同前、二七〇頁。一部表記を改め元の表記をルビに示した。原文を以下に示す。

仁安三年十二月廿五日 宣旨、

去廿一日伊勢太神宮正殿東西宝殿門垣及内外院殿舍悉以焼失、訪之先規、曾少比類、早仰記伝明経明法道博士、權中納言藤原朝臣、式部大輔藤原朝臣、内藏權頭藤原朝臣、大外記清原頼業、中原師尚等、且就先例言上可量行之事、且引旧史、勘申可被准拠之蹤者、

(42) 児玉幸多・小西四郎・竹内理三監修(一九八四/昭和五十九年)『日本史総覧Ⅲ 中世Ⅱ』四六頁。新人物往来社。

- (43) 榎村寛之「斎宮千話一話」第五回 平安時代の「公定価格」。「斎宮歴史博物館」HPによる。二〇二一年十月二十九日閲覧。

<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/saiiku/senwa/journal.asp?record=105>

- (44) 五味文彦(一九八五年十一月)『古今著聞集』と橘成季(上)」、古代学協会『古代文化』第三七卷第一一号、一四頁。

- (45) 注11、五四〇頁。

- (46) 注10に同じ。『著聞集』における伊勢関係説話として、本話(二六四話)、第二六話、第六八話、第五四四話、第六九二話を挙げている。

- (47) 注11、六一一頁、補注一一。序には「余」、跋には「予」と登場する。他に末尾の第七二一話に「成季」と三人称で登場するが、後人により追記された話である可能性があるので、今回は含めないこととする。また五味氏(注44)は、「予」と登場する話ではないが、家隆・隆祐関連の説話に成季が登場していると考察している。

- (48) 卷六第二七六話に関しては、小野恭靖氏による考察がある。小野恭靖(二〇〇一／平成十三年五月)「芸能説話の生成―『梁塵秘抄口伝集』巻十と『古今著聞集』―」、「『国語と国文学』第七八巻第五号(特集 中世文学における説話的なもの)、東京大学国語国文学会、至文堂、三四〜四三頁。第二七六話は、「自らの音楽の正統を主張するためであることは言うまでもないが、同時に

古い伝承を持つ説話を自分のところまで手繰り寄せ、さらには後代まで語り継いでいこうとする姿勢を持っている」説話だという(三六頁)。

(しまだ りょう 本学博士後期課程)